

## Ⅷ. 教科研究特別研究

### 第1章

# フィンランドの教育を読み解く ～個人主義、柔軟性、基準、自己責任をキーワードとして～

鈴木 克彦

【抄録】 教大協のフィンランドの教育視察団に参加し、各訪問校で観察したことを中心に、フィンランド教育を「個人主義」「柔軟性」「基準」「自己責任」をサイクルにした文化的背景をもつものとして、学校制度や教育課程を含む公教育全般を分析する。集団主義の文化や国民性をもつ日本の教育との比較も試みる。

【キーワード】 個人主義 集団主義 柔軟性 基準 自己責任

#### 0. 教育視察の概要

私は日本教育大学協会及び文部科学省の主催する海外教育施設視察行事で2009年度「フィンランド・スウェーデン国立大学法人附属学校団」の一員として、平成20年10月28日から11月12日までフィンランド（ヘルシンキおよ

び近郊都市に11日間）とスウェーデン（ストックホルム3日間）の学校とその他の教育関連施設の訪問およびそこでの研修を行った。参加者は北海道から九州までの教員養成系大学附属の幼・小・中・高および特別支援学校から成る35名である。

【表1 研修及び訪問先一覧】 注：幼・小・特別支援校は別日程

月 日	内 容
10月29日（木）	・ヘルシンキ市内視察 ・教育コーディネーターからフィンランドの教育に関してオリエンテーション
10月30日（金）	・ソトゥンギ中学校                      ・国家教育委員会
10月31日（土）	教職員宅訪問（ヴィヒティ市）
11月1日（日）	自主研修
11月2日（月）	・クオッパヌミ総合学校（小中高）
11月3日（火）	・ヘルシンキ大学附属ヴィーツキ教育訓練校（高校、教育実習） ・WSOY書店（教科書を扱う書店）
11月4日（水）	・ティックリラ高校                      ・イタケスケス図書館
11月5日（木）	・ヴァスヴォリ高校                      ・ハーガ・ユースホーム（学童保育）
11月6日（金）	・ヴァリア職業学校
11月7日（土）	自主研修後、シリアラインにてストックホルムへ出航
11月8日（日）	ストックホルム文化施設市内視察
11月9日（月）	・モーバイ中学校 ・BUP訪問（児童青少年のための心のケアセンター）
11月10日（火）	資料まとめ

#### 1. フィンランドの教育を読み解くキーワード

教育はその国（や民族）の文化や歴史の積み重ねの上に成り立つ人間の活動である。フィンランドの教育を読み解くためには、その文化、社会、国民性を束ねるキー

ワードがあるとわかりやすい。私は「個人主義」「柔軟性」「自己責任」の3語をフィンランド文化や社会と教育を結ぶキーワードと捉えている。実はこれらは靴家（くつ）さちこ氏がその書「本当のフィンランド」の中で書いていたものである。実際に短期ではあるが、私のフィ

ンランド教育フィールドワークで、同様に強く感じたことである。長年フィンランドで生活した靴家氏の視点は確かなものであり、私はその視点を借りて、短期滞在で

の経験を眺めてみたい。またさらに私は学校教育を中心に見る場合、「基準」ということばを柔軟性と自己責任の間に入れた。

【図1 フィンランド教育を読み解くキーワードのイメージ】



フィンランドに限らずヨーロッパ（特に北欧）では人は個人主義の発想で行動する。個人のニーズは多様なため、個人間や組織に対応の柔軟性が必要とされる。柔軟性によって、個別化に対応するが、ある一定の基準を超える結果を出さねば社会に認められない。基準をクリアすることが大切で、順位やランキングは意味がない。基準を越えられなければ、それは自己責任であり、次は個人が柔軟に自らの新たな道を選択していく。国や自治体も柔軟な、やりなおしの利くシステムを構築しておかなくてはならない。

## 2. フィンランドの教育

### (1)フィンランドについて

2004年度実施のPISA（学習到達度調査）において、フィンランドは、数学・科学の応用力・読解力・問題解決能力の4分野においてトップクラスの成績を収めことから、徐々に成績を落としていた日本には人口5百万ほどの北欧の一国がなぜという疑問とともに、「フィンランド詣出」とまで言われるほど、日本の教育関係者の学事視察団がフィンランドを目指すようになった。

フィンランドは人口約500万人、国土の3分の2が森、10分の1が湖、白夜、オーロラ、サウナ、ムーミンなどの北の果ての静かで穏やかなイメージの国である。そのため教育だけが突出して世界レベルの水準を上回っているように思われが、ノキアやリナックスというハイテク分野においてもトップレベルの国でもある。さらにフィンランドは世界的には国際競争力世界一、先端技術世界一、政治的清廉潔白度世界一、高福祉社会と国際的に信用され高く評価されていることは知っておくべきだ。これらが自然資源では木材ぐらいしかないフィンランドで起り得たのは、優秀な人材という資源が前提にあるからである。高度な知識・技術は教育を経て獲得されるものであり、国家的な努力が必要なことは言うまでもない。フィンランドは人材育成と経済活動を結び付けることに成功した教育立国である。

-----フィンランド大使館のHPから-----  
フィンランド概略：フィンランド（フィンランド語の国

名：スオミ）はヨーロッパ北部に位置しています。人口は520万人、面積は日本（377,829平方キロ）よりやや小さい338,000平方キロです。首都ヘルシンキと首都圏地域を含む人口は956,800人です。

数百年に及ぶスウェーデンとロシアの統治下に置かれた後、フィンランドは1917年に独立し、1995年に欧州連合に加盟しました。現在は、機械金属製品、電気機器製品が輸出の50%、林産物製品が30%を占める先進工業国です。インターネットの使用率が最も高い国の一つであり、携帯電話数が固定電話数を上回っています。

### (2)フィンランド留学経験をもつ高校生（私の勤務校）の話

私の勤務校に今年6月までフィンランドの高校に留学していた生徒がおり、派遣以前に事前調査として実際の学校生活をインタビューし、若干の情報を得ることができた。

彼によればフィンランドの学校はたいへん自由な雰囲気、先生も気軽である。コーヒーを飲みながら授業をしたり、好きなミュージシャンが着ているのと同じ服を着たりしている先生もいる。英語を話せる人は若い人が中心で、話す能力が重視されている。授業では先生はパソコンとプロジェクターを毎回使う。パソコンは生徒が自由に使えるよう開放されている。学期は5学期制で、1学期につき6週間授業（毎日同じ時間割）があり、7週目でテストが行われる。テストは学期末に1日1教科、2時間半だが、問題数は少なく楽だと思ったそうである。しかし40%正解しなければ落第、再試験はない。

授業はヨーロッパのリラックスした雰囲気を感じとれるコメントだが、40%の正解をしなければ合格できないうえに、再試験はないということは、個人の自由は認め、柔軟に対応するが、最後は一定の基準をクリアしなければ、落第という自己責任という結果になる。

フィンランド留学に関して言えば、平成22年に一名、23年度に一名と私の勤務校からフィンランド留学をする生徒が居る。彼らはそれほどフィンランド志向が強い訳ではない。名大附属校のように小規模学校であるにも関

ならず、連続してフィンランド留学をする生徒が居るということは、フィンランド自体が留学生の受け入れに積極的なのであろう。

### (3)フィンランドの教育の特徴

フィンランドの教育の特徴を国家教育委員会で受けたフィンランド教育についての説明などから、教育目的(方針・姿勢)、教育方法・教育内容(教育課程)・教育制度(状況、教師)・その他(国民感情)に分類して箇条書きで列挙する。これは私の分類であって、国家教育委員会がこのように提示したのではない。

#### 1) 教育目的・方針・姿勢

- \*教育の平等が保たれている。性別・地域・家庭の経済状況に関わらず、平等な教育を保障する。
- \*教育は消費ではなく、将来の人材育成への投資と考える。

#### 2) 教育方法

- \*能力別指導やランキングの否定。
- \*平等の原則だが、子供がみな一様に扱われることはない。能力が劣ったり、社会環境が恵まれなかったりする子には支援がある。違いを認め、異なることを恥としない文化が背景にある。
- \*他人と比較して上か下か、という考え方をしない。

#### 3) 教育内容・教育課程

- \*教育の自由化(1992年に教科書検定制度廃止、授業時数配分の弾力化、義務教育での年間授業時数はOECD加盟国最低レベル)
- \*1990年代の改革で子供中心の教育に切り替えた。
- \*個人の能力に柔軟対応、自分から特別授業を選択できる。

#### 4) 教育制度・状況・教師

- \*学校間のレベルの差がない。
- \*基本的に公立学校のみ。
- \*義務教育(基礎教育)は中学まで。その後、高校か職業学校を選択。選択は自己責任。親に相談することはない。高校は評定7以上(10段階、ただし最低は4、入試はない)必要。高校へ行けないから職業学校という訳ではない。2008年は職業学校を第1希望とする生徒が、高校進学希望を上回った。
- \*中学卒業後の進路については、9年生で考えさせる。進路未定者や、高校進学の評定が足りない生徒は10年生の制度がある。成績を上げなおす学習、職業を多視点で考える場としている。

\*高校から職業学校へ、職業学校から高校へというルートもあり、いつでもやり直せるという意識が定着している。

\*少人数教育(最大25名)

\*小学校から大学院まですべて無料。小中学校では教科書、文具、給食の無償の支給さえある。高校からは教科書は自己購入。

\*教師教育のレベルが高い。(教師になってからも研修、専門的な資格取得をしてステップアップ、年最低3日の有給研修)

\*教師の質が高く国民のレスペクトが高い。(修士号取得者、高校生にとって人気No.1の職業。10倍の競争率)

\*教師の裁量権が大きい。

#### 5) 国民感情・その他

- \*言語が3カ国語(フィンランド語、スウェーデン語、サーメ語)。
- \*近年英語重視(小3から導入)公務員は英語ができないとれない。以前はスウェーデン語が必須、しかも公用語である。
- \*読書が好きで、図書館が充実している。
- \*親が読み聞かせを子供が小さい時に親がする。

上記のように特性をまとめると、フィンランドの教育は基盤部分では平等を重んじる国民気質が教育システムに反映しており、誰でもどこに住んでいても平等且つ最高の教育機会を国民は得ることができるし、またその権利がある。教師への国民の信頼度が高く、また大学院卒を教師資格としたことで、教師教育が成功していると考えている。その証左として、教師は高校生のあこがれの職業であり、また次のようなエピソードもある。イギリスのブレア首相が首相就任挨拶でイギリスの再生のために「教育、教育、教育」(“Priorities remain education, education, education, but …”)と「マントラのごとく」(BBCの記事での表現)3回連呼したのを受けて、当時のフィンランド文部大臣はPISAで世界の注目を集めたフィンランドの教育は教師の質の良さに由来することを強調するために「教師、教師、教師」と演説の中で唱えた。

重要な工業資源もなく、食料生産力も乏しいフィンランドでは、人材こそが資源であり、教育による人材育成を国を挙げて行おうとしている。フィンランドの国情や歴史的背景を見ると、20世紀半ばまで厳しい状況の中にあった(スウェーデンによる統治<1155~1809>ロシアによる統治<1809~1917>と独立戦争)。少ない国民であつても支え合って生きていくために、高い税負担を容認する国民の了解を得られた。



#### (4)教育制度

フィンランドでの教育にたいする基本的な考え方は2点。制度面では性別、地域、家庭の経済的状況に関わらず平等な教育がおこなわれること。文化の背景として、個々を尊重しながらのびのびと育てる精神的風土が共有され、違いを認め、異なることを恥としない気持ちをもっている。

平等な教育と言っても、皆が同じ教育を受けるという意味ではない。先生も生徒も個性があり、その個性に従ったまちまちのやり方で教育がおこなわれる。校長はそれをサポートする立場にある。中学では学習能力担当の先生（学習支援相談員）が、生徒に「自己分析」をさせ個別の学習を支援する。自己分析は将来の生活をイメージさせ、現実の自分と比較しどういう選択をすることがベストなのかを考えさせる。

フィンランドの学校制度は図2を参照されたい。

小中一貫教育で義務教育は9年間、これは日本と同じだ。基礎教育の特徴は、(特別支援など) 個々のニーズにそった教育がおこなわれることや、考えさせる教育また自分発見の教育がおこなわれる。

興味あることは10年生の制度だ。基礎教育後の進路が未定であるとか、またはもう一年余分にやって義務教育の内容をしっかりと身につけるために再チャレンジしたいと思う生徒のためのものである。落第ということになるが、フィンランドではこの10年生を終えた生徒はむしろリスペクトされる。10年生は高校に附属することが多い。またはこの一年間自分をみつめさせようとする職業学校に附属することもある。約3%が利用している。職業ガイダンスなど、将来の見通しを得られるような工夫もある。10年生の1年間は逆に義務教育段階で、飛び級も存在する。小学校入学を親が遅らせることもできる。学校も親も柔軟な対応である。

基礎学校（総合学校）卒業後は2つに分かれる。高校進学か職業（訓練）学校かを選択する。いずれも3年だが、途中の進路変更は可能だ。高校への進学は基礎学校での成績と本人の希望で振り分けられる。9年生の10段階評価の成績（と言っても4～10の7段階の評価基準）をもとに合否が決まる。最低評価平均が7はないと高校へは行けない。それ以下は職業学校へということなのだが、最近は職業学校もIT、メディア、介護など人気がある。職業学校の教師は一流で、その道の専門家であることも職業学校人気の背景となっている。また広範な職業分野で資格が重視される資格社会というの大きな要素であろう。

進路選択で日本と大いに違うことは、中学から自分で生きていくためと言われているが、生徒の進路選択では親の出番はない。高校になると保護者に一切連絡などなしで生徒だけで進路を決めていく。大学の授業料も無料であり、日本のように親のスネをかじって大学に通わせ

てもらうのではないからこそ、生徒だけの希望で大学を決めることができる。

大学へは大学入学資格試験を受けなければならない。これは高校卒業資格ともなり、1科目の試験時間は6時間、4科目ほど受験しなくてはならない。春秋年2回で、飲み物軽食つきで挑む大学入学資格試験の例は表2のコーディネーター・ヒルトネン久美子さんが簡単にまとめたものを資料として提供してくれた。(表2)。これは採点も大変で、数か月かかるようだ。大学に入るためにはこれと高校での成績、さらに個別の大学入試を経る。この入試は専門知識を問われる。専攻したい学科の指定された専門書を読み、難易度の高い試験が課せられる。大学定員は高校卒業後の学生や、職業訓練校、社会人など定員枠がある。大学入試の段階である一定の専門知識や力量が問われる。

大学は3～5年、修士課程までが基本のようだ。ポリテク（高等職業訓練学校）という職業学校の上の学校もある。

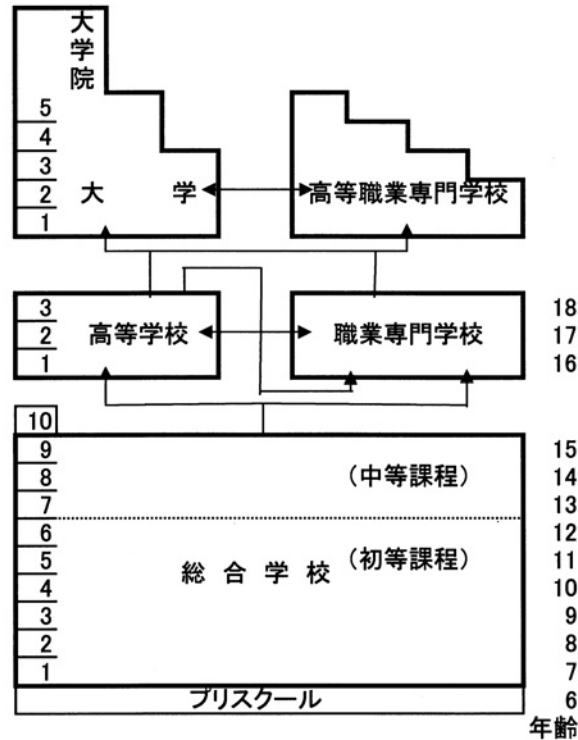
就学前教育として2000年から始まったプリスクールがある。6歳児を対象に1日4時間。小学校か保育園に附属し、小学校の45分授業に耐えられるように、遊びを通して学ぶ場として自治体が準備するもの。これも無料である。(ただし保育園は有料)99%がプリスクールに入っており、その後小学校へ行く。自閉や暴力行為等の理由でプリスクールでは上手く行かない場合、専門家の判断をもとに0年生でもう一度プリスクールで学び、一年遅れで小学校に入学する。

#### (5)教員養成システム

大学3年間（180単位）の後、2年間の修士課程（120単位）を進む中で教師資格を得る。大学も少なく（10校程度）、教師になることが難しい。それだけに教師に対する尊敬の念が強く、教師資格取得者は学校ごとに校長の裁量のもとで採用が行われる。一旦採用されれば、異動はない。

ヘルシンキ大学の教員養成には2,000人以上の希望者があるが、200人ほどの合格者しかいない。教員養成課程は小学1年～6年までを担当する「学級担任コース」と7年生以上を担当する「教科担任コース」がある。教科担任コースでは専門分野以外に教職課程を学ぶ。修士の教育専修の割合は教育全体20%、教科専門50%、実習30%であり、教育実習は秋から春まで、半年間ある。基礎2.5カ月、フィールド1カ月、応用2.5カ月の3期に分かれる。

【図2 フィンランドの学校制度（国家教育委員会のパンフレットより）】



【表2 大学入試資格試験（資料提供：ヒルトネン久美子さん）】

2008年秋の国語の大学入試資格試験

9月12日（1回目）文章力（理解力）を見る試験。5つの課題から3つ選択して答える。戦争に焦点をあてた題材で、各問題1～2ページの分量での回答が要求される。

例：

- ①フィンランドの1954年の小説、Unknown Soldier（無名戦士）by Vaino Linnaを読んで、戦争について感じることを書く。
- ②Linnaの小説中の人物間の会話のやり取りから、それぞれの関係について表現する。
- ③公共ギャンブルポスター「高齢者を支えよう」のポスターとしての効果を分析する。（小説の「無名戦士」は映画化もされ毎年独立記念日ごろにTVでも放映されますが、その中の1シーンが使われています。軍で大佐に逆らう若者たちが罰則として耕地に立ち続けていますが、敵軍機が攻めよせる中でも立ちすくんでいる場面です。）
- ④継続戦争時の国内の生活について書かれた小説Tunteet（感情）1962年by Marja-Liisa Vartioの中で当時の女性の立場などに触れています。女性の立場や体験の表現方法として、どのような工夫がされているかを分析する。
- ⑤Vartioの作品にもLinnaの使用した文章が利用されている。どのようにまたどのような目的で利用されているかを説明する。

9月22日（2回）エッセー問題。14種類の課題から1つを選択し4～5ページ書くことを要求。基本的には小説、詩、チャット（ゴシップ記事）などのジャンルの異なる文章体がチョイスとしてある。また絵を見て、エッセーを書くというチョイスもある。

例：

- ①同じ本や映画を見て異なった感想や感情が湧き出ることがある。その経験について自己分析をしながら説明。
- ②スターについて：その人気と才能との関係は？職業をなりつつあるスターというプロフェッションの今後について。
- ③結婚生活は短く、その一方で挙式は派手になりつつあるトレンドについて。
- ④バルト海を救えるか。
- ⑤クリエイティブな人とは。
- ⑥過疎地でも学校統廃合が進んでいる。その理由と影響についての推測。
- ⑦宗教上の聖地について、絵を見て考える。
- ⑧スポーツ雑誌のコラム「フィンランド人は歴史上、常にスポーツをナショナリズムを愛する国民であった」を読んで、支持する。
- ⑨ヘルシンキサノマットの記事について「テクノロジーは人類を幸せにするか」を読んで、エッセーを書く。
- ⑩調査結果などの資料から、「世界は賄賂なしに生きられるか」など。

PISA調査（2003）の問題の1つに、学校の落書きについて、二人の意見が示され、一人は「絶対にいけない」と言い、もう一人には「芸術性が見出せるなら、それはそれでいい。もしすべてをダメと言うなら、町中にあふれている看板や広告も取り払うべきだ」と言う。この二つの意見について、「どちらに賛成するかその理由を書きなさい」というものだった。大学入試資格試験の問題と比較してみると、よく似ている。日ごろからこのようなことに論述形式で答えることに慣れているのだろうか。

この問題については、日本の生徒は25%が無回答だった（フィンランドは無回答率8%）。テストといえば、選択回答形式に慣れている日本人児童には、自ら考えて自分の意見を述べるのが苦手だからどう答えてよいかわからないのも無理はない。

### 3. 私が見たフィンランドの学校

#### (1)各学校で共通しているもの

授業形態、授業参観、授業の意義、音楽の授業、生徒管理、生徒指導、校舎・設備の面で各学校に共通して見られることを書く。

私は古い話で恐縮だが、30年前にアメリカ、オハイオ州アイオワ市で1週間中学校のフィールドワークしたことがある。教師は自分の教室をもち、そこに集まってきた生徒を教え、生徒は短いセス（3～4分の休み時間）の間に自分の選択教科に従って、次の教室へ移動する。数週間、毎日同じ時間割で、授業は午後2時か3時に終わる。（アメリカでは授業後は季節ごとにかわるスポーツの部活に参加する者、家へ帰る者が居た。フィンランドは近隣のスポーツクラブに行くようだ。）広い食堂や各自の机はないが、テーブルとソファのあるリラックスした雰囲気職員室など、フィンランドも欧米の一般的な学校形態と共通した体制や設備をもつ。昔と違うところはパソコンの普及である。事前調査で明らかのように、生徒も先生もパソコンの使用は学校に不可欠である。

いずれの学校訪問も1日研修で、食堂で昼食をいただくこともした。ただし基本的に訪問者の昼食は有料である。盛りつけに手間取らないような食事だが、どこもおいしかった。

**授業形態：**欧米の一般的な授業方式、つまり授業をする先生の教室に生徒が行って、授業を受ける。各先生はそれぞれ自分の教室を持っており、日本のように生徒が居るホームルームに教師が出かけて授業を行うのではない。パソコンとプロジェクターは教科指導の必須アイテムで、私が見学したすべての教室で使われていた。

体育の授業は運動場で行われることはない。というのはフィンランドの一般的な学校は中庭程度の遊び場ある

いは駐車場はあるが、日本の学校に必ずある運動場はない。冬の期間が長いフィンランドでは、必要ないのであろう。体育館はある。アイスホッケーを模した遊びのような授業に生徒たちは楽しげに興じていた。

1クラスの人数は20人程度。これは幅があるが、最大でも高校の心理学の授業で35人の授業を見たが、これはまれであろう。中学まではホームルームがあるが、高校はほぼ大学に準じる形で授業が行われる。

**授業参観：**私の研修テーマは「積極的参加型授業、自ら考える授業」であり、この観点から見聞してくることであったが、このテーマは定点観測的にじっくり腰をすえて見ないと見ることができない。毎日学校を変えて、数分ずつ授業見学をし、教師との対話もしつくりとできた訳ではないので、表面的な観察かもしれないが、以下のような観察結果を得た。

a. 積極的な生徒同士の話し合いの場面は一部で見かけたが、どの授業もという訳ではない。多くは教師が質問を投げかけ、いろいろな生徒が教師との1対1の関係での対話をして、ディスカッションの状態を作り出す。内容を教師がリードしていく方法が一般的である。

b. 私の専門教科である英語の授業では、授業の前半は英語のみであるが、後半はフィンランド語を交えながら、内容の確認をしていた。中3の英語の授業は15分ほど観察したが、母語使用は語彙を母語で確認するときだ。日本の高2レベルの語がかなりの量あった。小学校から英語を習っているフィンランドでは英語は英語で学ぶことはあたりまえのことであろうが、すべて英語で授業が行われる訳ではない。発音練習はあまり大きな声でないところは日本と共通である。近年必修外国語がスウェーデン語から英語になったと聞く。若い人で質の高い英語を話す人が多いし、商業地域ではこちらが英語で話しかければ誰もが当たり前のように英語で答えてくれる。が、全体的にはレベルに差があり、やはり学習して身につける英語力は差が出るものと思われる。

フィンランドの英語事情についてすこし追加的に記しておく。北欧の国民は英語が堪能であることはよく知られている。ところでフィンランド語は英語が属するインドヨーロッパ語族とはちがう。アルファベットは共通（文字の読み方はローマ字式）ながら、発音、文法はかなり違う。言語的には英語とは全く違うとフィンランドの英語の先生も言っていた。

ただ、ヘルシンキの街中のホテルや店で英語を使うと、英語ですぐに答えが返ってくる。公務員採用では英語ができることが条件であり、学校の先生は差があ



るにせよ、どの教科の先生も英語で尋ねれば英語で答えが返ってくる。英語教育は小学校3年から始まる。小学校の授業はフィンランド語も使用される。文法についても（必要最低限は）きっちりと教えられる。教えられる英語はイギリス英語だ。テレビ放送では英語のものは、吹き替えはせず、フィンランド語の字幕がつく。

**授業の意義：**コーディネーターを勤めていただいたヒルトネン久美子さんによると、日本の教室でよく耳にする「これはテストに出るから大事だぞ」という教師の発言を、もしフィンランドでしたら、子供たちは「じゃあ僕は勉強をしない」という答が返ってくるそうだ。理由は学校での学習は自分が幸福になるためにどう役に立つのかが問題であり、「テストに役に立つ」学習内容は生徒自身の学ぶ要求を満たすものではない。教師は自ら教える内容がどう関わっているかを生徒に対する説明責任を負う。ましてフィンランドではテストの点数で競争させる教育ではない。自分には幸せになる権利があり、学校での学習がどうそれに寄与できるのか、また学校や自治体はその権利を保証する義務があるというのが、フィンランド人の一般的考え方である。

**音楽の授業：**音楽の授業はどの国にもあるのだが、フィンランドではポップスが音楽の授業で主に教えられる。授業の70%ほどでポップスを扱い、生徒はギターの弾き語りを全員が習う。ドラムスやエレキギターのできる者は音楽の授業では花形である。ギターはどの学校の音楽室に備えてある。ギターは単音も和音も比較的安価な価格で紡ぎだせる楽器である。私が30年前にアメリカアイオワ州の中学校をフィールドワークしたときには、音楽の授業ではオーケストラの楽器の一つを3年間ずっと習って、最終的には他の楽器とのアンサンブルが楽しめる程度の演奏ができるようになるのを見てきた。楽器は一通り覚えれば、一生の趣味ともなるので、和音が弾けるギター演奏が採用されたのであろう。

**生徒管理：**さすがノキア、リナックスのハイテクの国と思ったのは生徒の出欠がパソコンで管理され、自治体が生徒管理システムソフト（ビルマWilma、フロンティア Fronter）を導入し、コミュニティーで共有するネットワークで親が生徒の出欠状況を確認できる。各先生は授業が始まるとまず出席の確認をして、授業中または授業後にパソコンに個々の生徒の履修内容・出欠状況・学習状況を入力・更新する。親は職場のパソコンから子供出席状況を確認でき、欠席の場合は親のコメントが必要となる。もちろんパスワードが必要である。また先生とのメールのやり取りも可能。職場のパソコンでの学校へアクセス（私的な使用）は、共稼ぎがあたりまえのフィン

ランドでは許されているとのこと。

生徒の科目選択もパソコンで自宅からオンラインでできるようになっている。こうしたネットワークの管理は市などコミュニティーレベルで管理されている。各家庭のパソコン普及率は100%が前提であると同時にフィンランドではネットワークを通じての情報収集は市民の権利として保証されている。2010年7月からブロードバンド接続を国民の基本的権利とする法律が施行された。（2010年6月29日フィンランド運輸通信省のプレスリリースから）

**生徒サービスチーム：**フィンランドの学校にはもちろんさまざまな問題を抱えた生徒は居る。家庭の問題もさまざま、離婚率も50%と高く、どの学校にも「生徒サービスチーム」が設けられている。そのメンバーは校長、スクールサイコロジスト（精神面、家庭の悩み、ADHDなど心の病気の専門のカウンセラー）、スクールカウンセラー（いじめやけんかなど一般的な生徒指導のカウンセラー）、ガイダンスカウンセラー（学習進路相談のカウンセラー）、スクールナースが配置されていて、さらに担任や特別クラスの教師が加わり、問題にチームで対処していくシステムが整っている。日本のように担任にすべての負担がのしかかるということはない。

**校舎・設備：**新しい学校は玄関を入るとすぐに広い食堂となっている。中心部にらせん階段を設けてあり、生徒は朝学校に来るとこの食堂を抜けて、教室へ向う。ここ



には照明装置が完備したステージが設けてあり、皆が集まつの行事は食堂で行われる。半分くらいの学校ではヨーロッパでは好まれるらせん階段がオブジェのように配置され、デザイン的には申し分ない。

フィンランドの学校には基本的には運動場がない。中庭ていどの広さのスペースはあるが、体育を行うグラウンドはないのが通常である。体育は体育館（本校の第2体育館より小さい）で行う。プールもない。水泳は公共施設のものをを使う。学校から先生が生徒を引率して出かけ、泳がせる。雪が降り積もる時期が長いフィンランド



では運動場や屋外プールはあまり意味がない。

さらにフィンランドの学校には図書館もないか、あっても非常に小さい。これは理由があって、公共図書館が充実しており、授業での図書館利用は地域の公共図書館を使う。

職員室についても一言。教員はそれぞれ自分の教室があるため、そこに授業に必要なものは持ちこんで授業の準備をする。そのため職員室は、いわば教師のリビングルームのようなもので、コーヒーやお菓子などがテーブルに置いてあり、ゆったりできるソファが配置されている。教員はここで談笑したり、打ち合わせなども行ったりする。全職員向けの会議は職員室とは別に、会議室がある。

**高校のクラス：**中学まではホームルームがあるが、高校にはホームルームはない。これは教師不足を補うためと授業の多様性を提供するためにHR制を廃止したそうだ。単位制と言ってよいだろう。義務教育ではなく、自分が勉強したいから入学したという前提で、生徒の自主性が尊重される。しかし、教師と生徒の関係が薄れ、いじめの把握も遅れるなどの弊害もある。また中学にホームルームがあると言っても、授業は教科の先生の教室に行って受けるため、日本のようにHRに教科の先生がやってきて、HR単位で授業をうけるのではない。そのため小学校のようなクラスの意識はほとんどない。

## (2)各訪問校（抜粋）について

### 1) ソトゥンギ中学校



13才～16才の生徒数460人、教員37人の中学校を訪問した。図書室へ案内され学校の話聞いたのだが、フィンランドの学校でこれだけ大きい図書館があるところは少ないとのことだった。確かに後に何校か訪問したが、せいぜい1教室かその半分程度の図書室であった。ここは日本のごく普通の公立小中学校にある図書室か、もう少し小さい程度の図書室であるが大きい方になる。本好きが多いと聞くフィンランドでなぜ？と思うのだが、その理由は地域の図書館が充実しており、各学校は地域の図書館を連携利用している。

ハロウィンの頃だったからか、女性の先生方は魔女の衣装で迎えてくれた。この学校では自然環境保全のプロジェクト学習を全校的に行っている。どの学校もこのようなプロジェクトを積極的に取り組んでいるようだ。ちなみにハロウィンの習慣は、アメリカから入ってきたものだそうだ。

ソトゥンギ中学校では、教員らで構成される生徒サービスチームと別に「サポートスチューデント」と言って、上級生が下級生をサポートするシステムがある。学校の案内、選択授業、学校生活全般の相談役として活躍をするが、週2時間のサポートスチューデントコースの授業を受けないとサポートスチューデントになれない。授業中に会議があることもあるが、公欠扱いになる。

### 2) クオッパヌンミ総合学校

入口にはコートかけがあり、寒い国の学校という印象をもった。廊下や階段が化石のウミユリが模様となった大理石で作られている。生徒たちはほとんどが裸足（正確には靴下）で歩き回っている。フィンランドは家庭では靴を脱いでうちにあがる習慣があり、小中学生は校内ではほとんど靴下姿で過ごしている。なかにはスリッパをはいている者もいた。



担当の先生は女性で、この地域の市議員を兼務している。学校の教師が市議員を兼務することは珍しいことではない。ただし、報酬は無償である。議会は昼間勤務している議員のことを考慮して、夜7時から行われる。



食堂は広く、小学校と併設で小学生が給食を食べていた。この食堂には照明・音響設備完備の本格的ステージ（写真左方）もある。

授業見学中〔授業時間内〕に2回、生徒の呼び出しのような放送が全校放送でかかった。フィンランド語なので、内容はよくわからなかったが、よほど緊急なことであったのだろうか、後に通訳を介して聞いてみると、校長先生が生徒を放送で呼び出したのだそうだ。授業中の放送はよくあることで特別なことではないようである。後ほど校長先生が挨拶に来られたので、放送のことを尋ねてみると、友達の物を盗んだ疑いのある生徒を教室から呼び出したそうである。名前を放送でよぶことで、関係する生徒にプレッシャーをかける意味があったそうだ。この指導方法は日本ではあり得ない。

もうひとつこの学校では生徒の扱いに関してのエピソードがある。団員の一人が授業参観中、ヘッドホンを耳にして音楽を聴いている生徒がおり、教師もそれが分かっているようだが、なぜ注意しないのかと質問をした。ヘッドホンを聞いていることで他の生徒には迷惑はかかっておらず、音楽を聴きながら勉強するのが、その生徒の最も好む学習スタイルだからそのままにしているという返答だった。他の学校でも同様の光景を目にして、同じ見解だった。生徒に甘いということではなく、個の違いへの柔軟な対応と解するべきか。

### 3) ヘルシンキ大学附属ヴィーツキ教育訓練校

ここは高校で、教育実習を年がら年中行っている。歴史と伝統のある大学の附属ということで、格調が高いと感じた。教員はたいていラフな格好をしているものだが、案内担当の校長はフィンランドで出会った唯一ネクタイ&スーツ姿の先生だった。学校間の優劣差は基本的にはないのがフィンランドの教育の特徴ではあるが、この校長はそんな前置きをしつつも、全国で2番目に優秀な高校であるとも自慢げに言っていた。



私たちは心理学の授業を見学した。教育実習期間が数カ月あるのと、ここは教育実習のための機関でもあるため、私が見学した心理学の授業は教育実習生によって行

われていた。教師と生徒の対話で授業を進めていく。一人の生徒が発言中に意見を述べ始める他の生徒があると、さかさず先生は「シッ」とその生徒を制止する。相手の言うことをきちんと聞いてからということだ。実習指導の教員は教室後部で指導案を片手に盛んにメモをとっていた。

授業が終わるとすぐに担当教官と授業の反省が始まる。1つの授業で1時間の打ち合わせと事後の1時間の反省があるそうだ。このシステムは我々の教育実習と同じだが、期間は6か月続く。

教師養成の教育は大学3年間（180単位）の後、2年間の修士課程（120単位）が必要とされ、全員が修士以上である。大学そのものが少ないこともあい、教師になるのは難しい。それだけに、教師への尊敬と信頼は強い。

### 4) ヴァスヴォリ高校

我々の滞在中フィンランドでは珍しく雪は降らなかったのだが、ついにこの日は雪に見舞われた。私にとっては突然の雪のように思われるのだが、車、バス、列車、トラムなどの交通機関に何の支障もなくこの地の人々は当然のごとくに生活が営まれるところはさすが北の国だ。

校内の案内は国際理解クラブの生徒たちがやってくれた。彼らは私たちに5時間ほど付き合ってくれたのだが、授業に出なくても大丈夫かと聞くと、担当教科の教員の了承を得ていることと、欠席した分は後から先生から課題をもらい、家庭でやってくるので大丈夫だとのことだ。学校のため（我々のような視察者への対応）に生徒が個人的に奉仕してくれるのだから、当然なのかもしれないが、教師の柔軟な対応ぶりにやや驚きを感じた。いろいろな学校で生徒が授業を欠席して案内や説明してくれるのだが、皆このような形で授業を抜けて来るのをありがたいやら、日本なら考えられないことなので、これでいいのかとも思ったが、皆ほんとにホスピタリティー満点の子ばかりだ。昼休み中、暇だろうまた日本へのお土産もいるだろうからと学校を出て、雪の中、学校近くの巨大ショッピングモールに買い物に連れていってくれた。彼女たち（写真の3人）もそちらが楽しいようだ。



この学校はこの後に紹介するような職業学校ではないのだが、メディア関係に力を入れている。放送の実習授業を見学したときに会った担当教師は放送会社での職歴を買われて、ここで教職についた。設備は本格的で、スタジオ設備は実際にラジオ放送が可能である。これが（普通科）高校かと思われるほどの力の入れようだ。フィンランドではどの地域に居ても格差のない同じ教育を受けられるのだが、特色を出すことはむしろ奨励されている。前日訪れたティックリラ高校では音楽で特色を出していた。何を特色とするかは校長の裁量だ。

#### 5) ヴァリア職業学校

フィンランドは50%が職業学校に進む。日本の職業高校とは違い、職業のプロになる訓練・実習が授業のほとんどである。もちろん進路選択は柔軟に対応するシステムができており、高校⇄職業学校に双方向の進路転換は可能だ。ただ時間は2倍かかる。

ヴァリア職業学校はバンタ市にある生徒数4000人以上という大きな学校だ。職業学校は基礎学校を終えて、高校ではなく職業を得て社会に出ようとする生徒が、何らかの職業資格を得るための学校ではある。フィンランドの社会では職業資格はとても大切で、職業に就くためには資格が必要となる。それぞれの職業に必要とされるスキルを一定の基準をクリアしなければならない。それだけの力を職業学校では、身につけることができる。成人になって新たにあるいは就職先で資格がない人やブラッシュアップのための再教育機関でもあり、4000人中2480人が成人である。さまざまな個人的なニーズに、年齢の枠を超えて、柔軟に答えてくれる。文化、運送、技術、観光、社会福祉、電気関係の6セクターを持ち、ほぼすべての職業分野をカバーする。

我々は校内を校長のライラ・プロケル先生に案内され、



溶接、機械工作、木工、ヘアドレッサー、電気配線、建築作業などの実習授業を見学した。機械や施設などの設備は実際の現場と同じである。建築物の基礎工事の実習では、雪が降る中、生徒たちはヘルメットをかぶって作業着でセメントを構造物の基礎部分に流し込む作業をし

ていた。先生はこの寒さの中、Tシャツ一枚で生徒たちに指示を出し、作業を進めている。校舎内に入っただけで見学では、どれも実際の作業工程を実習するもので、生徒は楽しみながらも真剣に実習に取り組んでいた。

これだけ充実している内容をもつ職業学校だが、日本の職業高校のように就職先の斡旋は一切やらない。半年間の義務の職業体験で、社会に出て、研修するのだが、大方の生徒はその間に就職先のめどをつけるそうで、学校はノータッチである。個人の努力で就職先を決める。卒業後の進路は85%が職につき、10%はポリテクへ進学、5%は結婚ないしは徴兵である。最後は自己責任なのだ。

昼食はレストランで生徒らが作ったランチをいただいたが、ギター演奏も生徒が披露してくれ、サービス内容も含めて本格的なコース料理に満足だった。私たちのテーブルを受け持った生徒は、イギリス・スコットランドから料理を学びに来ていた。料理長がテーブルにやってきて自己紹介してくれた。彼は今、日本料理に大変興味を持っていて、機会があれば現在の職を辞してでも、日本で修行したいそうだ。名刺まで我々に差し出し、学ばせてくれるところがあれば連絡してくれとまで頼まれた。

教育は現場で3年以上の経験を持った元プロで、教員資格のある先生があたる。4～5年に一回は社会に戻り、研修として実際に職場に出る。デジタルに弱い高齢の教員のための研修もあるそうだ。

職業学校はプログラムも施設もたいへん充実しているように見える。資格社会でもあるフィンランドでは職業学校は近年ますます人気が高くなっているとのことであった。

#### 4. 考察

フィンランドの教育を、個人主義、柔軟性、基準、自己責任という4つの語を理解のためのキーワードとして眺めてきた。日本を集団主義的傾向が強いとステレオタイプ化することはよくないことであるが、違いを際立たせ、比較のためにあえてそうする。

##### (1) 個人主義と集団主義について ～トリアンディスの理論をもとに～

個人主義と集団主義の概念をトリアンディス（2002）の「個人主義と集団主義」から説明を行いたい。トリアンディスは個人主義と集団主義を実習的データから比較・分析を行い、相互の影響やそれぞれの文化的背景をもった者どうしが、いかに文化間の誤解を解き、どのようにうまくやっていけるかという解決策や関連する教育訓練の議論にまで言及している。

個人主義と集団主義の定義は、トリアンディスの理論を高井（2010）が表3のようにまとめたものがある。

【表3 個人主義と集団主義】

個人主義	集団主義
・個人優先	・集団優先
・個性を大切に	・集団同調性を大切に
・個人的ニーズを尊重	・集団ニーズを尊重
・自己アイデンティティ	・集団アイデンティティ
・私的自己を重視	・公的自己を重視
・内・外集団 <sup>1</sup> の区別をしない	・内・外集団の区別が明確

トリアンディスの個人主義・集団主義は文化レベルでの個人・集団主義であり、これが個人レベルになると自己・他者中心主義としてとらえることができる。個人が自己をどう捉えるかを独立か相互依存かおよび、同一か異質かの観点の2種類のものを組み合わせ分類することができる。水平的個人主義、水平的集団主義、垂直的個人主義、水平的集団主義という分類である。

【表4 個人主義×集団主義、水平×垂直】

	個人主義	集団主義
水平	独立・同一	相互依存・同一
垂直	独立・異質	相互依存・異質

個人主義、集団主義の把握に「水平的」「垂直的」関係性を考慮すると極めて複雑にならざるを得ない。トリアンディスは4つの質問をすることで、どの分類にはいるかを見ることができるとして、それぞれを次のような記述で簡単にまとめている。

- ① 垂直的個人主義…達成志向的である
- ② 水平的集団主義…協力的である
- ③ 垂直的集団主義…礼儀正しい
- ④ 水平的個人主義…独自性がある

#### 【北欧の個人主義に言及している部分】

ダウン (1991、1992) の報告として「スウェーデンは水平的個人主義文化を持つ」国であり、「北アメリカはかなり垂直的個人主義文化である」(p.46) としている。フィンランドはスウェーデンと非常に似た傾向をもつので、同じような個人主義でも北アメリカとの差はあるだ

ろう。

ロキーチ (1973) の自由と平等を含む18の価値に順位付けをする調査では、「自由と平等の両方に価値をおいた人はスウェーデン型の社会民主主義者で、自由を強調し平等を低い位置に位置付けの人はレーガン型の自由市場主義者」「合衆国の大統領は自由を頻繁に使い、平等は稀にしか使わない、スウェーデンの首相たちはしばしば両方を使用」(p.53)

#### 【教育への言及】

教室で見られる明白な差異の1つは、垂直的集団主義者はめったに質問しないが、個人主義者はしばしばそれを行う。個人主義者の教師は、垂直的集団主義生徒は積極性がないことに面喰っている。しかし彼らが行わなければならない正しい帰属とは、垂直的集団主義者は彼らの内集団から知識を得るように訓練されてきており、質問されなければ、内集団のために貢献しないということである。それに対して、個人主義者は、個人の貢献を知らしめるように社会化されている。」(p.163)

#### (2)個人主義または集団主義を文化的背景にもった教育の比較

私は教育のシステムに反映される日本との比較のために、それぞれのキーワードについて表5のような対比的な語で比較してみたい。

【表5 教育システムに反映された個人主義と集団主義】

国	フィンランド	日本
精神風土	個人主義	集団主義
対応型	柔軟	硬直
評価	基準	順位
責任所在	自己責任	全体責任

#### 【授業形態から見た比較】

日本では一斉授業の形態が一般的な授業形態である。一つの答え、一つの考え方にいかに収斂していくかが、一斉授業形式の教師の技量の見せどころとなる。フィンランドでは「子供は自分自身にあった教育を受ける権利がある」という基本的な考え方に立ち、一人ひとりに平等で機会均等の教育が実践される。同じ科目を学習にするにしても、それは生徒が自ら考え学ぶことと基本に据

<sup>1</sup>内集団、外集団という概念は、集団のもつ排他性、閉鎖性という特徴から考えられたもので、アメリカの社会学者W・G・サムナーの用いたことばである。内集団は、個人が自らをそれと同一視し、所属感を抱いている集団で、それに対して外集団は、「他者」と感じられる集団で、競争心、対立感、敵意などの差し向けられる対象である。一般に、内集団への所属感や愛着が増し、その凝集性が高まるとき、それに応じて外集団への対抗心や敵意が強まるという傾向のあることが知られている。この対内凝集と対外排斥の相関という事実が、内集団・外集団の関係におけるもっとも興味深い点である。したがって、この二つの集団の区別は、客観的基準による区別というよりは、集団成員の内と外に向けての心理の動きに応じて輪郭づけられてくるものといえよう。(yahoo百科事典より引用)



えているので、内容や方法が「一律」になることはない。たとえばクオッパヌミ総合学校で見学した国語の授業では、生徒が小説の登場人物、ストーリー、感情の移り変わりを説明するという目標をもったものだが、題材は生徒各自が自ら選んで読んだ本であり、一斉に同じ物語を読み、理解を先生が主導で行う一斉授業とは異なり、グループ内での生徒相互の説明、発表を主体とした授業展開であり、生徒の個性や自主性、協調性を重んじる授業であった。こうした授業構成はフィンランドでは一般的なものである。もちろん25名以内の少人数クラス編成であるので、それができるのではある。

最近日本でも「ユニバーサルデザインの授業」という言葉が聞かれるようになった。「聞かれるようになった」と書いたのは、自分で実践しているのではなく、知識として自分の中にあることを意味する。ユニバーサルデザインの授業とは、特別支援教育の視点を取り入れた生徒全員がわかる授業作りを目指すものである。国語の授業でユニバーサルデザインの考え方を取り入れた国語授業ユニバーサルデザイン研究会のHPを見ると「その一番の方策は、特別支援教育の理念や視点を授業に導入することです。特別な支援が必要なAちゃんのためにする手立てが、実は、理解力はあるけど十分わかっていないBちゃんのためにもなります。また、理解力が優れているCちゃんが、Aちゃんにわかってもらおうとかかわることで、一人ひとりの学び直しや本質的理解を促します。つまり、特別な支援が必要なAちゃんに対する指導や支援の工夫は、バリアフリーとしてではなく、全員の子どもが「わかる・できる」国語授業のユニバーサルデザインになるのです」とある。こうしたユニバーサルデザインのコンセプトを持つ授業はフィンランドではかなり一般的に見られると言って、過言ではないだろう。教師が画一的な評価をするのではなく、様々な視点を持ち、得意な部分を生かしてあげることで、総合的に評価することが重要である。

#### 【特別支援】

フィンランドでは、教育の平等、格差なし、比較しないという精神は徹底している。これは下の生徒を救う。競争が人の能力を伸ばすという考えも他方にあるであろう。実際、ビジネス界は相当競争的である。しかし、競争原理を特に基礎学校、高校では学力をつけさせる手段とはしない。

個別のニーズに対応するため、少人数学級（25名以内）でクラスが編成され、特別支援学級では、さらに少ない10人程度の少人数で教育が行われる。特別支援は、障害児だけでなく、学習不振の児童、生徒も対象となる。一人ひとりが自分の能力や理解のペースで学ぶことが保証されている。理解が遅ければ、一人ひとりがゆっくり分かるまで個別に指導が行われる。

個人主義者は、自由と平等に高い価値を置く。自由を貫くためには、社会は柔軟に個人に対応する必要がある。教育においては、さまざまな能力、個性、価値観をもつ学習者に対して、教育を提供する組織体は柔軟な学習環境を創造していく必要がある。児童生徒の多数のニーズに合わせ、学習面の問題をもつ児童生徒にもよいケアを行うことも必要である。特別支援の必要があれば、ほんの2、3人の生徒のために人員を補充することもある。その特別支援の内容も、単に学習が遅れがちな生徒に対する特別支援も含まれる。優秀なこどもは助けがなくても自らの能力を開花させることができると信じられている。

働くことは生活の糧を得るためだけのものではなく、社会参加であり、誰もが成し遂げようとする自己実現の手段である。身体障害者が働くことで社会参加し、社会とつながることで自己実現を図ろうとする。それを保証するために、政府やコミュニティはできる限りの手段でハンディを克服できるよう努力することは当たり前と考えられている。障害者を支える活動は、学校のみならず町を歩いてみれば、いたるところで目にすることができる。

#### 【必修科目、選択科目】

フィンランドでは教科、科目の選択の幅が広い。もちろん必修科目もあるのだが、その必修科目も選択の対象となる。進路学習相談の担当の教師と協議しながら、生徒自身が多くの講座の中から必要と思われるものを選択するのである。自由かつ自己責任である。

#### 【スウェーデンとフィンランドの自立への考え方】

福祉先進国であるスウェーデン、フィンランドなど北欧の国々は歴史的背景からもスウェーデンの影響を大きく受けている。個人主義もスウェーデンの個人主義と同様で、北欧型個人主義とまとめてもよい。教育に対する国策として、個人の自由を守るため、自立と平等の保証を打ち出している点でスウェーデン、フィンランドも同様であり、早い時期から子供は大人扱いされる。教育の無償化もこの自立を支えるためのものである。

#### 5. 最後に

私は訪問中ヘルシンキでフィンランド国営放送の朝のニュース番組のインタビューを受け、レポーターにうまく乗せられて、「日本はフィンランドの教員養成のシステムを買うと思うか」という質問に「イエス」と答えてしまった。フィンランドはPISAで世界1位になり、世界中、とりわけ日本から多くの視察団が訪れるのを知り、彼らがPISAでの成功の第1の要因は教員が優れていることであると信じ、教員養成のシステムを売りに出せば経済大国の日本は買うのではないかと考え

ている人々がいるらしい。ビジネスチャンス逃すまいと探りを入れてきたようだ。だが、放送時には小説家であるコメンテーターに、自殺大国で、心のケアが十分できない日本がフィンランドの教員養成システムを取り入れたとしても機能しないだろうといともたやすく一蹴された。

自殺に関して言えば、何年前までフィンランドは自殺の多い国であった。政府と国民が一体となった、自殺防止のキャンペーンやシステムを作り上げ、自殺を激減させた経緯がある。問題に対するこうした実行力が日本にあるのかと問うているのかもしれない。日本では自殺は個人的問題と考える傾向があり、ほとんど無策に近い状況で今日まで来てしまった。

フィンランドと日本とは国情、国民性、文化背景が大きく違う。教育は社会、文化、歴史を背景としており、フィンランドの教育が学力世界一だからと、まねしたところですぐに破たん来る。部分だけでなく、システムとそしてその背景にある精神風土を十分に考慮したうえで、日本流のやり方を考えだせばよい。

フィンランドは教員の質の高さこそフィンランド教育の礎だと考えている。教員に関しては日本はかつては収入こそ高くは無いが、社会からは尊敬される存在であった。しかし社会や経済構造の変化、親の高学歴化、マスコミのバッシングなどから社会的地位の低下がもたらされた。フィンランド流に、教員は大学院卒になってしまうのも一つの解決の手段かもしれないが、今の時点でも誇るべきものがある。

The Teaching Gapという本によれば、小学校における算数のアメリカ、ドイツ、日本の授業を比較したところ、米独より日本はプロセスを大切に指導に長けている。その原因は校内研修のもと複数教員が関わる授業研究が日本では盛んで、共通のことばで分析が行われることにある。アメリカでは授業は教師が自分の部屋に生徒を招いて授業を行うので、他者が授業を見ることはない。校長と言えども見る機会はないようである。授業は一人ひとりの教師には孤独な作業のようだ。フィンランドでも事情は同じで、授業中は通常教室の鍵をかい外部から容易に入れない（これは遅刻したものを入れないためであるが）。日本の教師は互いが授業を見て、批評し合い、授業技術の向上を図る。このシステムはフィンランド訪問中に聞いたことがない。確かに自己研修が保証されているが、大学にもどってアカデミックな講義を受けるなどが中心のようだ。目の前の児童、生徒を通して、授業研究という指導技術を組織的に向上させる方法を全国津々浦々の学校で定着している。授業研究こそが、日本の高い教育レベルをオープンな形で維持していくシステムであると言える。

同じ視察団の中の理科の先生はフィンランドの理科の授業を見ながら、「日本の理科の授業の方が断然良い」と

断言した。日本のというのは「私の」と理解した方がよいであろうが、研修報告にも「自分の授業に自信が持てた」と書いている。その理由は日本の生徒の認知の仕組みまで掘り下げて検討した授業づくりを授業研究を通じて（少なくとも教育研究先端校である附属学校レベルでは）行っているからだと言った。

フィンランドのホテルで同室だったF教育大学附属中学校では、授業を先輩教師が見る際、授業途中で助言がなされる。その際、授業者の教師は正座して先輩教師の話を聞く。授業中のことであり、生徒も固唾をのんでそれを見守る。伝統とはいえ、トリエンディスの垂直的集団主義の一例として、著書に載せてもよいようなことである。これはフィンランドよりショッキング度は強かった。

ヒルトネン久美子さんによれば、フィンランド人の持ち家率は高くない。ヘルシンキのような都会ではアパートに住むのは不思議ではないが、都心を離れた田舎でも彼らはアパートに住む。田舎であっても一戸建ての家は少ない。土地への執着心はあまりない。土地があっても死ねば国ないしは地方のガバメントに寄付をする。社会保障がしっかりしており、年をとれば国が老後の生活を保障してくれる。土地があろうがなかろうが関係ない。そのために高い税金を容認している。教育に関しても、そうした信頼感が強いとのことだ。

ヨーロッパで育まれた個人主義は利己主義とは違い、個人の権利と自由を尊重し、個人の尊厳を他者やコミュニティの重要性の根拠とする思想である。これは教育の中にも強く根付いたものであると感じた。

「各校訪問」で書いた「ヘッドホーン事件」での担当教師の見解、つまり「それが彼の最適な学習スタイルだからそのままにしている。人に迷惑がかからないならそれでよい」は、日本的集団主義的発想の持ち主である私なら「みんながそんなことをしたらどうなる？」と一喝するところだ。個人主義の国で、みんなが同じことをすることはないのであろう。つまり、これがフィンランドでは一般的な教師の見解であることは、他の教師にこのことについて同様の質問をしたときに、同様の答えが返ってきたことから明らかである。靴家氏によれば、他人の迷惑にならなければ、好きな編み物をさせて落ち着いたら学習を進めるとか、教室中を歩きまわることさえ許されるそう。確かに心理学の知見である適性処遇相互作用（Aptitude Treatment Interaction: A T I）に見られるように、個人の学習スタイルに合った学習方法を取ることが、知識、技能の獲得のcritical pathだとは聞いているが、ここまで柔軟な指導姿勢は何？と思ってしまう私は集団主義を自分の中に見てしまう。

歴史、文化、経済、生活習慣、地理的条件、国民気質等どれ一つとっても日本とは違いがあり、良いからと言って単純にフィンランド教育を私たちの教育に取り入れることはできない。教師対生徒の1対1型の授業進行は、互いを個として尊重しあう授業風土がなければ、生徒の内面的思考を育む手段とは成りえない。昨今盛んになってきた協同学習という手段も形だけではなく、1対1型のコミュニケーションの背景にある個人主義思想から見つめなおす必要がある。

協同学習は強い個の実立がなければ対等な関係性を持つことが難しい。そのためアジア人はグループ行動では多数に従わなければならない気持ちが起こり、プレッシャーとなることがある。

アメリカでアメリカ人とアジア人のグループワークの比較研究で、アメリカ人は個を発揮できるよい機会と思う。他とは違うということを誇りとする文化を持ち、これは個人主義の文化でもある。ところが、集団主義的なアジア人はそこでの決定に不満でも従わなければならないというプレッシャーを感じて、嫌いだと言う。

協同学習は個人主義の発想から生まれたものと集団主義の発想から生まれたものでは、その性格は大きく違う。個人主義的発想からだとなれば、集団を構成するメンバーは非常に「強い」個人である。だから違いがあり、その違いを個人間で尊重しなければ、争いになってしまう。もともと集団への同調性が高い個人から構成される協同学習では同調することだけが強調され、個人がないがしろになる。まずは1対1の関係性の中で、「強い個人」「自立した個人」を育むことが大切なのではないだろうか。

## 《その他》

以下の資料はフィンランドから帰国後に勤務校で書いたエッセーである。直接関係はないが資料的価値はあると思い掲載した。

## 1. 総合人間科（生徒）研究収録に寄せた私の文章

### 私のフィールドワーク

皆さんが総合人間科でフィールドワークに行ったように、私はフィンランド・スウェーデン教育事情視察研修に文部科学省より派遣されたヘルシンキ、ストックホルムで皆さんと同じようにフィールドワーク（FD）を行いました。視察研修の正式報告は別途あるので、ここでは柔らかな旅行記的報告（休日編）を私のFDとして載せます。授業の雑談の一部と思い、読んでやってください。

#### 《ヌークシオ国立公園；フィンランド》

ヘルシンキでの休日はフェリーで30分の世界遺産とし

て有名なスオメンリンナの要塞島の見学を予定していた。近いので午前で終わるとして、午後はどうしようかと思っていたら、ホテルで同室の広島大学附属高校の先生がヘルシンキ校外のヌークシオ国立公園の森と湖を見に行くと言う。一緒に連れていってもらうことにした。

森の国と言われるフィンランドだ。都会ばかりでなく森も見られる。午前中にスオメンリンナの要塞見学を終え、午後は昼食をサンドイッチで大急ぎで済ませ、列車とバスを乗り継ぎヌークシオ国立公園へ向った。バス停を間違えたり土日の時刻表が日本で調べてきたのと違っていたりで、バスはすでに居なかった。タクシーで料金メータを気にしながら1時間飛ばして入り口に着いた。運転手には帰りも迎えに来てくれるように頼み、散策路を二人で歩いた。

木々と湖と苔むした岩の自然造形の絶妙な美のバランスに胸打たれる思いだ。都会の近くでこんなすばらしい森を見ることができるとは、さすが森の国である。フィンランドの子供たちの将来の夢として森にサマーハウスを持つことというのが圧倒的に多いと聞き、当初夢がささやか過ぎるのではと思ったのだが、これを夢として語る気持ちが理解できる。森へのフィンランド人の思いや愛も分かる気がした。

#### 《シリアライン；バルト海》

フィンランドのヘルシンキとスウェーデンのストックホルムは飛行機で行けば1時間ほどだが、これをフェリーで土日船内一泊かけてシリアラインで渡った。このフェリーがあまりに巨大かつ豪華で驚いた。日本でフェリー乗船経験は佐渡島へ行ったことだけで、目的地に到達することだけが目的のフェリーと比較にならないかもしれないが、シリアラインの船は船上部分が11階建てであり、華麗なサーカスやショーのエンターテインメントがあり、船の中央が11階部分まで吹き抜けで、ブティックやパブ、レストラン、みやげ物店などがちょうど町のストリートの両側に立ち並ぶように配置してある。夜通しパフォーマンスやバンド、歌手の演奏がストリートの中央で行われ、さすがに朝まで付き合うわけにはいかず部屋で寝てしまった。海外旅行ならではの楽しさを味わった。

#### 《ヴァーサ博物館；スウェーデン》

ストックホルムにはヴァーサ号という17世紀に建造され、当時スウェーデン軍最大の木製軍艦が現存し、博物館となっている。なぜこの古い船が現在まで残っているかと言うと、1682年にストックホルム港のドックで建造直後の出航時に難破沈没してしまい、長いときを経て1961年に引き上げられ、修復保存されたからだ。たった一隻の船の博物館だが、当時のままの姿であることと展示の方法の良さで、見学は長時間楽しめる。見所は船そのものの見事さと引き上げにまつわる苦労話がヴィジュアル化されており、今も修復作業が行われ、そのようすを



間近に見ることができる。さらに木造軍艦の研究室が備えられ、さえぎるものがない研究室での研究者たちの動きを間近に見ることができる。彼らに話しかけることすらできる。修復や研究のようすも訪問者に見せることで、古いものが現在でも息づいている印象を受け、見学がより興味深いものになることを狙った博物館の創造的な展示コンセプトに感心させられた。

以上は一部です。みなさん北欧は必見の価値あり。画像で見た人は私のところへ来て。

## 2. 学年通信に載せた文章

### \*\*\*フィンランドの教育 鈴木克彦\*\*\*

私は日本教育大学協会の附属学校教員海外派遣団の一員として、フィンランドおよびスウェーデンの学校教育や関連団体の活動の視察に16日間行ってきました。

御承知の方も多いかとは存じますが、フィンランドはPISAというOECD（経済協力開発機構）が2000年から2～3年ごとに行っている世界的規模の学力テストで好成績を納めたことから注目されるようになりました。数学リテラシーでは日本は2003年では1位から6位へと後退しました。（このときは香港が1位、フィンランドは2位）。読解力の面では14位、日本が順位を下げたのに比して、フィンランドは科学、読解で1位、問題解決力では3位と順位を上げてきました。日本には衝撃的なことと捉えられ、ゆとり教育と学力についての論争のさなかに火に油を注ぐことになってしまいました。

「百マス計算」等繰り返しや訓練による学力の定着への再評価が起こったのもこのときでした。日本からのフィンランドへの学事視察がこのころから爆発的に増えました。日本ではゆとりから転換がはかられ、学習時間が増加されることになりました。しかし2006年度調査では、日本は数学で6位から10位、科学では2位から6位へ、読解は15位という結果になりました（2007年12月発表）。

さて私は2010年10月28日より11月12日までおもにヘルシンキ（フィンランド首都）の中学校・高校・職業学校・国家教育委員会を訪れ、授業見学や現地の教員へのインタビューをしてきました。この間フィンランド語通訳のヒルトネン久美子さんがいっしょです。

ヒルトネンさんによれば、日本ではよく見受けられる先生のセリフ「これは試験に出るから、しっかり勉強しなさい」と、もしフィンランドの教室で言えば、即座にこんな答えが返ってくるでしょうということでした。「だったら、僕は勉強しない。僕は試験のために勉強しているのではない。自分のために勉強しているのであって、試験に役立つだけのものなら勉強する価値はないから」。

私がフィンランドの教室でみたことは、繰り返しとか訓練とからはほど遠いものでした。誰もが教育を通じて幸せになる権利があり、コミュニティーはその援助をし

なければならないという国民的合意があります。基礎学校（義務教育）のときから一人の市民として自立できる人を育てることが目標の一つで、市民性の教育を怠りません。学習時間も短いです。学校は2時で終わってしまいます。学校に通っているのだから、塾はありません。これは日本のゆとり教育と似ています。日本では2000年調査のPISA数学的リテラシーは「ゆとり」世代が世界一という結果を出しました。

### 【参考文献・資料】

- 靴家さちこ (2009)『住んでみてわかった本当のフィンランド』東京：グラフィック  
伊藤治己 (2004) フィンランドにおける小学校英語教育の実態調査  
タルヤハロネン (2008)『フィンランドを世界一に導いた100の社会改革』東京：公人の友社  
リトヴァヤック・シーヴァネン編 (2008)『フィンランドの先生学力世界一のひみつ』東京：桜井書店  
諸葛正弥 (2009)『フィンランド教育成功のメソッド』東京：毎日コミュニケーションズ  
リッカ・パッカラ (2008)『フィンランドの教育力』東京：学習研究社  
荻谷剛彦 (2006)『欲張りすぎるニッポンの教育』東京：講談社  
フィンランド国家教育委員会  
<<http://www.oph.fi/english>>平成22年2月25日現在  
Stigler, J. W. and Hiebert, J. (2000). The Teaching Gap  
New York: THE FREE PRESS  
国立大学法人附属学校団 (2010) 平成21年度フィンランド・スウェーデン教職員派遣研修報告書  
Triandis (2002) 個人主義と集団主義 東京：北大路版  
フィンランド大使館HP  
<<http://www.finland.or.jp/Public/default.aspx?contentid=197409&nodeid=41206&culture=ja-JP>>  
平成22年7月30日現在  
授業のユニバーサルデザイン研究会HP  
<<http://hwm8.gyao.ne.jp/kokugouniversal/kainituite.html>> 平成22年7月30日現在